
純桜学園探偵部の事件簿 ~桜の数え歌~

五十月夢路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純桜学園探偵部の事件簿 ～桜の数え歌～

【Zコード】

Z2793D

【作者名】

五十月夢路

【あらすじ】

主人公の福島瞳は、部活を探していた。すると、幼馴染みの、桜井陸に会う。陸は自分が、入ってる部活『探偵部』を紹介してくれ、瞳は探偵部に入ることにした。瞳が探偵部に入つて、一週間が過ぎた頃、探偵部に一通の手紙が届く。手紙の内容は、『純桜大学にあるサークルが、不気味な歌があると言われている、島に行く事についているので、それに付いて来て欲しい』と言つものだった。

桜の数え歌

桜の花がありました

花びら五枚

数えましょ

一枚 空に飛んで行き

二枚 風に吹かれ 消えていく

三枚 家の上に行き

四枚 土に埋められて

五枚 本のしおりに

これが桜の数え歌

季節は、春。

この季節は、私達の町に沢山の観光客が来る。観光客の目的は、
桜。私達の町に沢山桜がある。あちらこちらで咲く桜は、町全体が、
観光スポットになる。もちろん、学校もね。

私の学校……純桜学園は、市内でも一番桜がある場所。
連休がある日は、学校までもが、観光スポットになる。

春だけじゃなく、四季を通して、綺麗な景色を見させてくれるこの
町は、私の自慢！

そして、私の学校……純桜学園の校庭の桜は、見頃を迎えていた。
校庭に春風が走り、花びら達は春風に誘われ、校庭で舞っている。
入学式から一週間が経つた。一年生は、自分が入る部活を探して
いる。

そろそろ自己紹介しないとね。始めてまして、私はこの……純桜学
園の生徒の福島瞳、一年。私は今、部活を探している。って、いき
なり言わてもわかんないか。じゃあ、順を踏んで言つよ。

まず、私の学校では一年に一度、去年やつていた部活を、続ける
かどうかの紙が渡される。続ける人は、『続ける』と記す。続けな
い人は、『続けない』と記す。続けない人は、一年生と同じ期間だけ、
部活を、見学する事ができる。そして、一年生と同じ期間中に、次
にやる部活の名前が書いて紙を先生に出す。

ここまでで、分かつた？ つまり、私は、今言つたことがあつた
から、部活を探している。そして、次にやる部活の名前を書いて先
生に出さなくていけないのは、今週の金曜日。残り後・四日。

「はあ～」

部活を決めるのに、こんなに時間がかかるのは何故かつて思った
人もいるよね？ 理由は一つ。私の学校は無限大に、部活があるか
ら。私の学校はきちんと決まっている部活もあれば、自分達でがつ

くつたサークルや、同好会などなどいろいろな部活がある。（多分、100は軽く超えてると思う……）

それで、ここからが大変。そんな、無限大にある部活を一つ一つ探しなくちゃいけないんだから……。で、私が考えたのは、掲示板。掲示板には、この時期一人でも多くの部員を増やそうと、いろんな部活の張り紙を貼る。それを見れば簡単に、部活を探せるって考えただけど……。自分の想像を遙かに超えた事が起きたの。部活紹介の掲示板、ギリギリまで紙が張つてある。しかも、紙と紙同士が重なつていて、何がなんだか分らない状態になつていて、

「実際に見た方がいいかな？」

私は、体育館へ足を向けた。体育館では柔道部や、バスケットボール部、バレー部など、体育系の部活が集まっている。そんな体育館へ行く途中、私は図書室の前を通つた。図書室の前の廊下は静かで、図書室の中からは、『カリカリカリ』と鉛筆を走らせる音だけが響いて聞こえてくる。

図書室では、文芸部が本を読んだり、小説を書いたりしている。（文芸部も悪くはないかな？）

そんな風に思つていると、後ろから誰かが歩いてくる音がする。

後ろを見ると、私の幼馴染みおくれじごく 桜井陸君がいた。

「あれ？ 福島さん。どうしたの？」

桜井陸君は、さつきも言つたように私の幼馴染みで、小学生の時からずっと同じ学校。同じクラスになったのは数回しかない。桜井君は、3年の先輩や、近所のオバサン、他校の生徒からも人気で、朝、靴箱を開けると雪崩のようにラブレターが落ちてくるほど。幼馴染みだからと言つて恋愛感情は起きない。桜井君は誰にでも優しく接して。それも、人気の一つみたいだけど、私はあまり気にしない。話を戻そう。

桜井君は、分厚い本を何冊も抱えている。（何に使うんだろう？）聞いてみると部活で使うそうだ。

「部活で？」

「うん」

「そう言えば、桜井君って、何部に入ってるんだっけ？」

桜井君の噂だったら一週間もしないうちに広まる。そのため、聞いたとしても、自然と噂は自分の耳に入ってくる。だけど、部活は違う。桜井君が何活に入つて居るのか一度も聞いた事がなかつた。噂にするつもりはないけど、一度は聞いてみたい。

「えつと……福島さん聞いたら引くと思つよ？」

「そう？」

「多分……」

「大丈夫だよ！ 今、掲示板見て來たけど、思つていた以上に変な部活、沢山あつたしさ」

桜井君は少し、『ん~』と考える様子を見せてから、部活を案内してくれると言つた。

「ほんとー？」

「うん。あつ、そう言えば、福島さんって、部活やつてる？」

「うんうん。今は部活を探してるとこ」

「そうか。じゃあ、好都合かな？」

「何が？」

「いや。一いつの話」

そう言つと桜井君は、一人で歩き始めた。今にも鼻歌を歌いだしそうなほど嬉しそうな顔をして。私は、桜井君の後に付いていった。で、桜井君。桜井君がやつてる部活の名前つて何？

「着いてからのお楽しみ」

ギシッ ギシッ ミシッ ミシッ

桜井君と私が今いる所は、私達が普段使つてている新校舎ではなく、体育館の隣にある旧校舎。夏休みの、学園で行われる肝だめしの時くらいしか近づかない旧校舎に、私は今いる。

「部室……まだ？」

部活があると会場に、なかなか着かない。

「んー。この階段上がつてもう少しかな？」

桜井君の言葉は、相変わらず嬉しそうだった。階段は、ギシギシ
いつててる。いつ床が抜けるか分らない。

階段を上りきると、桜井君は左へ曲がつた。私はそれに付いて行く。幾つかの教室はあるが、名前のところがボケたりしていて、はつきりした名前が分らない。すると、少し先に行つていた桜井君が、あるドアの前で待つていた。私は、桜井君に追いつきドアを見るとドアには『会議室』と書いてある。

「会議室？」

「うん。ここが、俺が入つてる部活の部室」

そう言いながら桜井君はドアを開けた。

「おつそーい！」

「はい！？？」

桜井君の顔が引きつった。中から、誰かが人差し指を桜井君に向けて何かを言つてゐる。声からして、女の子だと思つ。

「全く陸君は！ 毎回遅いんだから！」

その声はどつかで聞いたことある気がするけど……どこだつたかな？

「悪い悪い。ちょっと立ち話してて」

「悪いと思つてんだつたら早く来なさい！」

口調はまるで母親だ。桜井君は慣れているのか苦笑いしてゐる。

「たぐー。今度からしないでね！」

「はいはい。でも、今回は意味のある立ち話だつたよ

そう言つと、桜井君は私の方を見た。

「俺ともう一人いるんだ。この子、部員になるかもよ？」

すると、中から、さつきまで桜井君と話していた人が出てきた。

「あー！」

私と、女の子は声が重なつた。

「秋！」

「瞳！ どうした？」

「へ？ 秋と福島さん知り合い？」

「知り合いつて言うよりも、親友」

「私と秋は声を合わせて、『ねえ』と言つた。

藤原秋奈。

通称秋。私の親友で、クラスのムードメーカー。秋がいるだけで、クラスは物凄く盛り上がる。秋と知り合つたのは中学の時から。最初、秋から声を掛けてくれて、それから仲良しになつた。高校に入つてから部活はそれぞれだつたから、最近話していなかつた。何の部活に入つたか分らなかつたけど、桜井君と同じ部に入つてたんだ……

「二人とも中に入つたら？」

桜井君の言葉で私達は我に返つた。中に入ると、見渡す限り本だらけ。私は、呆然として立ち尽くしていた。本好きの私には溜まらない空間だ。そうしてると、秋に話し掛けられた。

「瞳、この部に入つてくれる？ここ、物凄く楽しんだ！」

「そ、そなな……」

「部活まだ決めてないんだよね？」

「ん？ うん……」

「だつたら尚更！ ここに入つてくんない？ ここさ、部員がさ少なくてさ。瞳が入つてくれると助かるんだよね」

秋はそう言いながら、ドアの近くにあつたパイプ椅子を、私の前に置いた。

「瞳、どうぞ」

秋は、満足そうな笑みを見せた。

「有り難う。ね、こここの部員つて、何人くらい居るの？」

「んとね。部長と副部長、部員二人。だから……四人かな」

「そななに少ないの！？」

「だから、瞳に入つて欲しいんだよ～」

秋は、縋るような表情で言つてきた。

「そ、そなな……。そう言えばさ……こいつて何部だっけ？」

「部活名前がないで来たの?」

「つさ……」

「ああ、いいや。ちなみに、いはは、探偵部だよ」

探偵部（前書き）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

探偵部・・・以外だ。秋と桜井君が、こんな部に入ってるなんて。そもそも、この学校は変てこな部活が沢山あることで、有名だつたけど・・・まさか探偵部なんて部があるなんて・・・バタン!

「疲れたー！」

「シャキッとしなさい！」

「だつてー」

中に入つて来たのは、眼鏡をかけた男女だった。男子の方は近くにあつた、椅子に寄り掛かつた。女子の方は『まつたく』と言つてゐる。すると、私の前に座つていた秋は、立ち上がって眼鏡をかけた男女の方に行つた。

「おかえりー」

「ただいま」

「ただいまー」

「少し遅かつたんじやない?」

なんか、四人で話し始めちゃつたけど・・・眼鏡をかけた二人どつかで・・・。

「あ！ そうそう。真子！^{まこ}裕太！^{ゆうた}部員になるかもしない人がいるんだ！」

秋はそう言つと、今度は私の方に來た。

「あくまでも、なるかもだからな」

「そうだよ。見学しに來ただけだから・・・」

「そうなの・・・?」

秋の物凄く残念そうな声。オタクが思わず言つ『萌えー』つて、こんななのなんだろうね。

「あつそうだ。私、部活探してた最中だから、部活について詳しく話してくれないかな?」

すると、秋の表情がパッと明るくなつた。

「だつて！部長、部活の話聞きたいだつて！部長の出番だよ。」

部長と呼ばれた眼鏡の男子は、寄り掛かっていた椅子から嫌々立ち上がつた。そして、私の方へ歩いて、さつきまで、秋が座つていた椅子に座つた。

「じゃ。部長お願ひします」

秋の楽しそうな声。眼鏡の男子の瞳は何を考えているの分らない。何か、自分の本心を見ぬかれているような感じがする。（何を言われるんだろう？）ドキドキしながら待つてみるが、何も話さない。

「何話すの？」

「なんて間抜けな質問。

「話し聞いてなかつたの？」

「うん」

眼鏡の女子は飽きた言つよつた顔をして何を話すのか説明した。

「・・・これで分つた？」

「分つた。部活の内容とか話せば良いんでしょ？」

眼鏡の男子以外の全員で頷いた。

「じゃあ。何から話そつ。・・・」の名前聞いた？」

私は頷いた。

「それじゃあ、今いる部員を紹介しようか。僕は部長の高橋裕太たかはしゆうたで、こちらが、副部長の高山真子たかやまこ。部員の藤原秋奈と桜井陸さくいりく」

紹介された順に挨拶をした。

「じゃあ、次は活動内容か・・・これは、真子に任せんよ」

「ホント、面倒くさがりね」

副部長の高山と紹介された女子がそう言つてゐる間に、部長の高橋

君は、近くにあつた本を読み始めた。

「全く・・・えつと、始めまして。瞳さんって、何組だつたかしら？」

「2年C組です・・・って、私、自己紹介してませんが？」

「そうね。でもここは、探偵部ですよ？」

「一応、ここにいる皆は【探偵】としているからね。自己紹介しても、名前くらいすぐ把握出来るよ。って言つても、名札見れば分るけどね」

桜井君は本を棚に上げる作業をしながら言つた。（そつか・・・）
「じゃあ、そろそろ活動内容を話しましょ。ここ、探偵部の活動内容の基本は、掲示板に張られる依頼を解決する事。依頼を受けた時、情報に困らないように、新校舎から本を持ってきて、情報収集する。これが基本」

「まあ。これが基本で言つても、依頼受けた事がないけどね」
本を読みながら高橋君が言つた。すると、皆、話さなくなつてしまつた（え・・・）

「それ・・・本当？」

しばらくの沈黙。（絶対いけないこと言つたよね）しばらくして、
「ま、まあ。しうつがないよね？福島さん、もう少し探偵部について聞く？」

「う、うん」

その後、五分ほど話を聞いた。しかし、その話は、部活に直接関係のあるものじゃなかつた。唯一、部の決まりは
『部員同士は、必ず下の名前で呼ぶべし』だそうだ。

「この決まり、誰が決めたの？」

「私だよ。だつてさ、部員なのにお互い、改まって苗字で呼ぶなの、なんか・・・嫌だつたんだ。だから、この決まり作ったんだよ」
なんか、秋らしいな。

「どうだつた？秋が、こう言つた時」

「始めは聞いた時ビックリしたね。今ではもう慣れたけどね」

桜井君は、苦笑いした表情で答えてくれた。

「そりなんだ」

こんな風に話を聞いてると、楽しそうだなあ。

「ねえ、そろそろ本を棚に上げない？時間も少ししかないし」

「そりだね。福島さんどうする？」

「ん~、今何時だっけ？」

「四時をちょっと過ぎたくらいよ

「だったら手伝つよ」

「そう?..じゃ、その本、いっただけに持つてきてくれる?」

「はいー。」

一時間半後

「はい、お疲れ様でした」この続きを明日の放課後ね~」

高橋君が言つたが、その後十分ほど、皆は動けなかつた。

入学式から一週間しか経つてないのに部活は、本格的になる。その為、帰りが七時過ぎの部活があるそうだけど、私は五時半に学校を出た。家に着いたのは、六時ちょっと過ぎた頃だつた。家に着くと、自分の部屋に行き、バックを机に置いて、ベットに寝そべつた。
「何部に入ろうかな・・・」

そんな事を思つていると、今日の疲れが出たのか、私はそのまま寝てしまつた。

感想も、評価もお待ちしております。

二人の名前

『ジリリリリリル』

且隠れな音かするな

「あゝも！五月蠅いな！」

そう言しながら私は起きた。気が付くと私の隣

『以前お預けになつたが、私の『窓』詩だ。』

を理解する。そしてやつと振付く。

「塾」

「分つたら寝癖を直してすぐに行く！」

はい！」

私は、一階の鏡を見て寝癖を直してお母さんが、用意してくれた

「行つて来まーす」

「いじめられることは、一度

ここを便りで
お母さんの紹介をするね
和のお母さんの名前は
ふくしまやよい
福島弥生。

『私のお母さんは、皆から言われるんだけど、とっても若々しいんだ。お父さんとカフェを経営してるんだよ。ついでに、お父さんも紹介するね。お父さんの名前は、福島誠^{ふくしませいや}也って言うの。お父さんは力持ちだけど、体は細身なんだよね。『何処にあんな力があるのかな?』ってお母さんがいつも言つてる。』

あつ。それなら、塾に着くや。のんびりしてゐ暇ない。急がないと!

六時五十分

天來塾

(間に合つた)

「こんばんわ～」

中は少しざわついてる。(もつすでに、自習勉強してる人がいるよ。どんだけ、真面目なのよ)

私は、いつもの席についた。自分の席が決まつてる訳じやないけど、席つて自然と決まつていくもの。しばらくすると、講師の先生が来た。名前は、朝倉紗樹。あさくらさき二十歳後半の先生だけど、高校の制服着せると、普通の生徒にしか見えなくなる。前、新しく先生が来たと紹介された時、普通の生徒かな?って思ったほど。

「はいはい。静かに～！」

先生が言つと皆は静かになつた。

「はい、今日は・・・・・」

先生は、今日やる所について話してゐる。私はペン回しをしながら先生の話を聞く。別に簡単すぎてこんな風に聞いてる訳じやない。いつもだったら、先生をジ～ツと、穴が空くんじやないかつてくらい先生を見て聞いてる。でも今日は、探偵部の部長の名前と副部長の名前が頭の中でグルグル回つてゐる。

「どうかで聞いた事あるんだけど～」

ずつとそれを考えてると、前の方から先生がやつて來た。やつてないのを見つからぬ様に慌てて、隠しながらやつてるふりをする。先生は素通りしてつた。(良かつた) そしてまた、部長と副部長の名前を何処で聞いたか思い出そうと、ペン回しをしながら考える。

「あれ? 福島さん? 進んでないじゃない

(あれ! さつきたばつかだよね。いつの間にー)

「分んないのかな?」

「い・・・いや。分りますけど・・・・

「じゃあ、やるうね」

満面の笑みを浮かべ、朝倉先生は立ち去つた。(こつの中に・・・

) 朝倉先生は、影が薄いから度々こうこう事あるつて聞いたけど、

本当にあると怖いな。（家に帰つてからいつか）そう思い、私は鉛筆を走らせた。

八時五十五分（塾が終わる頃）

「じゃあ、このプリントを終わらせた人から帰つて良いよ」

そう言つと、先生はプリントを渡し始めた。プリントの内容は、今日のまとめだった。私はそれを、ちゃちやつと終わらせて、家へと帰つた。

「ただいま」

「おかえり。瞳、塾間に合つた?」

「何とかね」

すると、美味しそうな匂いがいてきた。

「今日はハンバーグでしょ！」

「当たり。早く手を洗つてきなさい」

「はーい」

私は洗面所の方に行つた。

「お腹すいた」あ、お父さん。もしかして、今まで寝てた?」

「何でわかつフアー」

「寝癖、ついてる」

「お父さん、少し髪とかして来て下さい」

「はいはい」

お父さんは洗面所の方に行つた。私とお母さんは、その間にテーブルに『ご飯や、味噌汁、今日のおかずのハンバーグを並べた。しばらくすると、お父さんが戻つてきて、家族そろつて『いただきます』を言つた。

食事が終わつて、私の部屋。

私は、机に向かつて勉強をしようとしてるとい。だけど、いざ、やろうとしても、宿題に集中出来ない。しうがなく私は、ベットに寝そべり、目をつぶつて、塾で考えていた事を思い出す。

（何時だつたかな？高橋裕太と高山真子の名前、聞いたの。もう少し…もう少しで思い出せるのに…）

そして、私は思い出した。

思い出した!「

思わず大きな声を出してしまつた。

「一年の時、聞いたんだつた」

一年生の定期テスト。高校生になつてから初めての定期テスト（中間テスト）が行われたのは、もうすぐ夏休みつて時だつた。

「今回の定期テストを返すぞ」

担任だつた、蝦原悠治先生。えびはら ゆうじ普段はとても優しい先生だけど、怒り出すと誰にも止められないくらい怖い先生だつた。その先生から、出席番号順にテストが返される。

そして、とうとう私の番。一応、勉強はしたけど自信は無い。

「瞳、後一步。惜しかつたな~」

残念そうな顔をして、先生は私の解答用紙を渡した。点数を見る
と、ホントに惜しかつた。返されたテスト用紙全て、後一步で九十
点が取れる点数だつたのだから。

「席に付け~。今回、高校に入つてからのテストはどうだつた？惜
しい奴もいただろう。そういう奴じやなくとも、夏休みに、予習・
復習をシッカリやるように！」

蛯原先生の言葉に皆、『は~い』と言つた。すると、授業が終わ
るのを知らせるチャイムが鳴つた。

「授業はこれまで~！」

「起立！礼！」

『有り難うございました！』

授業が終わると、皆はさつき返されたテストと睨めっこしたり、
男子では泣く真似をして、今回のテストの結果に悲しんだりしてい
る人が見受けられた。そんな皆を見渡してると、ある女の子が近づ
いてきた。

髪が肩くらいで、その髪の先が外に軽くはねていて。とてもカワ
イイ子。名前は、井藤千尋。いとう ちひる千尋は、私の友達。高校になつて初め
て言葉を交わした子。男子からとても人気があるが、本人は気にし
てない様子。千尋は、今回のテストについて聞いてきた。

「後一步で、九十点だつたんだけどね」

「惜しかつたじゃん！私も似たような感じだつたよ」

「お互い惜しかつたね」

「ホントう。あ、そそうそ一年A組に、優等生がいるらしよー！名前は確か～高山真子とか言つたかな？」

「へ～」

「なんでも、今回のテスト、全部九十点越えしてゐらしよ」

「本当！？」

私の言葉に、千尋は頷いた。

「見に行つちゃおうか？」

「行く行く！」

私と千尋はA組に向かつた。A組の前には沢山の人がいた。噂をかぎ付けて来たらしい。

「どうする？」

私が聞くと、見に行きたい気持ちをグッと堪え、千尋は昼に行こうと言つた。

- 昼休み -

昼休み行くと、人の数は減つていた。教室の後ろのドアから中の様子を見ると、窓ガラスの近くに、眼鏡をかけ本を読んでいる女子生徒がいた。

「あの子かな？」

私が聞くと、『そうちかもね』と千尋が短く答えた。すると、私の親友の秋がその女子に話し掛けた。それを見ていた私は、秋を呼んだ。

秋は、済まなそうな顔をして女子から離れ、私達の方に來た。

「ね、秋。あの人人の名前つて、高山真子でいいんだよね？」

「ただけど

「あの人つて、どんな人？」

「ん～、優しくて、とつても頼りがいがある人だよ

「高山さん、今回のテスト、全部九十点超えしてるって、ホント？」

秋は、思い出すようにして考え、その後『そうだよ』と言った。

私と千尋は『あの噂、本当だつたんだ』と、声を合わせて言った。

「あ、そう言えば。このクラスつて、九十点越えの人があもう一人いるつて聞いたけど誰だっけ？」

「もしかして、あの男子かな？」

秋は人差し指を、ある男子に向けて言った。私と千尋はその指先を見ると、眼鏡をかけた男子がいた。

「そうそう！あの男子。名前は確か？」

「高橋裕太。高橋君は、推理小説しか読まないんだよ」

「変な男子だね」

「でも、高橋君凄いんだよ。皆から『オタク』みたいな目で見られてたんだけど、からかってた男子を吹っ飛ばしたんだ！結構、運動神経良いみたいだよ！」

秋は興奮した様子で言った。すると、お昼休みが終わる、チャイムが鳴った。

「じゃあね、秋。色々教えてくれて！」

「じゃあね！」

あの二人か・・・

記憶（後書き）

変な文章になっていたりしましたら、お知らせください。

部活は決まつたが・・・

あの二人が・・・。高橋君の名前と、高山さんの名前を聞いた時、何処かで聞いた事あるなあ～って思つたら、一年の定期テストの時、噂で聞いたんだつた。

「でも、高山さんの名前、最近聞かないなあ」

しばらく私は、一人で色々考えていた。そして、ふと時計を見ると十時を過ぎていた。

「ヤバイ！ヤバイ！」

私は急いで宿題をやり始めた。

・翌日・ 部活を決めなくてはいけない日まで、残り・二日。

「行つて来まーす」

「行つてらつしゃい」

私はいつものように家を出た。でも、私はいつものように、学校へは向かっていなかつた。朝からテンションが上がつている人は、そうそう居ないと思つけど、私は必ずと言つて良いほど、曲がる所にさしかかると、溜息をついた。その理由は一つ。部活をまだ決められずにいるから。（残り二日しかないのに・・・）

「はあ～」

「なーに溜息なんかついてんの」

振り向くと、そこには千尋がいた。

「久し振り、千尋」

「久し振り」

相変わらず男子からの人氣は、劣らないな。近くを通つた男子は、頬を赤く染めて付いて来てるよ。

「どうしたの？」

「え?いや、何でもないよ」

「あんな大きい溜息ついてて、何でもないようには思えないけど?」

「たいした事じやないんだって、ホント……」「そうなの？」

「うん。あつ、そう言へば、千尋つて何部に入ってるんだっけ？」

「えっとね、美術部」

「そうか、千尋は絵が上手いからね」

「そうでもないけど」

（千尋は美術部か……）そんな風に一人で話してると、学校に着いた。私と千尋はそれぞれ自分のクラスに行つた。私は、自分の席につくと、また溜息をついた。

「ひ～と～み！」

ポンと私の肩を叩くと、『じつしたの～？』と秋が聞いてきた。私は、その質問には答えなかつた。

「はあ～」

「ほんとに、じつしたの？」

「部活・・・・・決められなくつてさ・・・・・」

「あと、何日だっけ？」

「・・・・三日」

「だつたら、うちに入つたら良いよ！」

「いや～、それも考えたんだけどね。『推理力』、つてものが私にはないからさ。無理かな？ つて思つてさ」

「それだつたら、心配ないよ。楽しくやれば良いんだもん！」

「秋らしいや・・・・・

その日一日、部活の事しか頭になかった。

（今日も行こうかな？）窓の外にある、旧校舎をボーッと眺めながら思つていた。

「瞳、部活のアレ、出したか？」

声のする方を見ると、今の担任の栗原桂吾先生くりはるけいごがいた。校内の【女子が選ぶカツコイイ先生ランキング】一位の先生。アイドル並みの人気がある。

「アレつて、なんですか？」

「アレつて、部活の紙だよ」

「ああ、アレですか。今週までには出しますよ」

「そうか、早く決めよう」

「はーい」

早くだからな、と最後に付け足して立ち去った。（家に帰つてからじつくり考えるか……）

・
- 帰り道 -

「はあ～」

登校の時のように、角で曲がり度、溜息をついた。

「どうしようなあ～部活・・・」

私はそう言いながら、空を見上げた。雲はゆっくり、ゆっくり流れていった。鳥も『カーカー』言いながら飛んでいる。

「楽しくやれば良いんだもん！か・・・」

秋らしいなと再び思う。推理小説とかは好きで、読んだりしているけど、ん～。探偵部でも良いかな？他にも、面白そうな部活なさそうだしな・・・どうしよう・・・

「はあ～」

しばらく、じつよつと懶んでいた。

「ただいま～

返事なし。今日は仕事の日か・・・私はすぐに自分の部屋へ行つた。

「今日は塾もないし

そう言いながら、バフッとベッドにつつ伏せの状態で倒れた。

「どうしようかなあ・・・お母さんは自分の好きな部活やつたら？つて言つて、お父さんも同じ事言つて・・・探偵部、入りたいな・・・

私はバックの中にしまつておいた紙を取り出した。（今日中に決めよう！）そして再び、ベッドに寝転んだ。しばらくしてからガバ

ツと起きて、紙に部活名を書いた。

「残りの今年と来年、楽しい方が良いしね！」

-翌日 - 部活を決めなくてはいけない日まで、残り・一日
私は、学校に着くと、自分の席にバックを置いて職員室に向かつた。そして、職員室の中で栗原先生を探すと、先生は自分の机の所にいた。

「先生、昨日書つてた部活の紙、持つてきました」

「そうか、・・・ん？ 探偵部？ お前、探偵部に入るのか？」

「はい、そうですが・・・」

「そうか、そうか。お前、入ってくれるのか

「嬉しそうですね。ちなみに、探偵部の顧問の先生つてありますか？」

「当然じゃないか

「じゃあ、顧問の先生つて誰ですか？」

「探偵部の人聞いてみると良いよ

「そうですか・・・」

探偵部の人・・・。秋ぐらいか、あの部に入つてて、親しい人と
言えば。教室に戻ると、秋は読書をしていた。邪魔はしたくなかつたので、放課後、聞く事にした。

- 放課後 -

「秋、聞きたい事あるんだけど

「何？」

部活に行こうとしていた秋を、私は止めた。

「秋達が入つてる部の、顧問の先生つて誰？」

「ん~瞳が部に入つてくれるなら良いよ？」

「部活の紙、今日出したよ。探偵部つて書いてね

「ホント~やつたー！ 瞳が入つてくれる！」

「秋は、ピヨンピヨン跳ねて喜んだ。

「嬉しいのは分るけど、顧問の先生は誰？」

「部に来てからのお楽しみ！ じゃ、部活、先行つてるね！」

「う、うん」

秋は嬉しそうに駆けて行つた。それにしても、顧問の先生は誰なんだろう?

あなたは、分りますか?

部活は決まつたが・・・（後書き）

誤字・脱字がありましたら、お知らせください。
感想や評価の方も待っています

顧問の先生は・・・

「顧問の先生って、誰なんだろう?ん〜・・・」
私は、教室でしばらく考えていた。すると、栗原先生が入つて來た。

「あ、先生・・・」

「まだ、部活に行つてなかつたのか」

「顧問の先生が、誰なのかな?」って考えていたんですよ

「だから、部員の人に聞けつて言つたじゃないか」

「聞きましたよ。でも、教えてくれないんですよ」

「そうか・・・じゃあ、部室行つてみたら良いんじゃないかな?」

「部室にいるんですか?」

「今はいないが、今から行こうとしているかもな

「どういう意味ですか?」

私はそう聞いたが、先生は『早く行け』と私を教室から追い出した。

「ホント、どういう意味ですか、もう~」

ドアの前でボソソと言つと、仕方なく探偵部の部室がある、旧校舎に足を向けた。

ギシッ ギシッ ミシッ ミシッ ・・・

初めて來た時と変わらない音が響いていた。

「やつとついた・・・」

(古い家とか、苦手なんだよね・・・)

元会議室があつた場所が探偵部の部室・・・。

「よしひ

気合を入れ、ハンドルに手をかけた。その時、ハンドルが勝手に

動いた。

「ひつ！」

私はバツ！とハンドルから手を離すと、その勢いで後ろに倒れた。

「いたたた！」

「あ、瞳。遅かつたジャン！」

中から出でてきたのは秋だった。私はお尻を摩りながら立ち上がった。

「あたたか。秋、なんか嬉しそうだね」

「だつて、瞳が部に入ってくれたんだもん！」

そう言って私の腕を引っ張りながら、中へ入ると中には、部の人

がいた。

「入つてくれたんですね。嬉しいです」

高山さんは嬉しそうに微笑んだ。他の、桜井君や高橋君も嬉しそうな表情をしている。

「よつひみ。純桜学園探偵部へ！」

皆は声を合わせて言つた。その瞬間、なんとも言えない嬉しさが、溢れ出した。

「やつと、部に入つてくれたな」

聞き覚えのある声が、後ろから聞こえた。振り向くと、そこには栗原先生が立っていた。

「先生！」

驚く私を気にせず、秋達は先生に話しかけた。

「先生、少し遅かつたんじゃありません？」

「先生しばらく顔、見せてなかつたんですけど、どうしたんですか？」

高山さんや桜井君の質問に、丁寧に答えていた。一人に説明が終わると、私のほうを向いて

「ようこそ、純桜学園探偵へ」と、微笑んだ。

「これから、よろしく

「よろしくお願ひします！」

その後、前回のように本を棚に並べて活動は終わった。皆疲れている様子だったけど、私は『疲れたー！』というほど疲れていなかつた。

「はーい、今回もお疲れ様～。各自、帰つていよいよ～」

疲れきつた高橋君の声。先生は、『まだ仕事、あるから』と部屋を出て行つた。外は夕方、カラスも人間も家に帰る時間。しかし、サッカー部も野球部も陸上部もまだ帰る様子はなかつた。皆より先に、私は学校を出た。

家

「ただいま」

返事なし。今日も仕事か・・・私は、自分の部屋へ向かつた。そして、ベットにうつ伏せの状態で、バフッと倒れた。そして、近くにあつたクッションを抱いた。

「やつと、部活ができるー！」

やつた。皆に『よつこそ、純桜学園探偵部へ！』言われた時の、あの何とも言えない嬉しさが、再び溢れ出した。しばらく、その嬉しさに浸つっていた。そして、顧問の先生が栗原先生だという事を思い出した。

「あれは、意外だつたなあ～」

栗原先生だつたら、もつと、こう、違う部の顧問の先生をしていいイメージだつたな。そんな事をしばらく思つていた。ふと見ると、時計の針は七時半をさしていた。お母さん達が帰つてくる時間まで、まだ時間がある。帰つてくるときに、コンビニで買つてたパンを、袋から取り出した。そして、一かじりして、机に向かい、宿題をはじめた。

宿題をはじめてから、三十分後。私は、ベットで本を読んでいた。

宿題を終わらせたわけじゃない。宿題をせりながら部活の事を考えていたら、集中力が切れてしまった。

「部活、これからやつていいくのか～。ホントに楽しみだな・・・」
これから、卒業するまで部活をする自分を想像してみる。なんだか、頬が熱くなる。

「でも・・・皆、いつもあの作業いしてるみたいだったな・・・依頼が無くて、暇だよね・・・」
そんな事をふと思つた。「まあ、いいや」と、再び机に向かい宿題をやりはじめた。

・翌日・

「依頼ないのかな～？」

私は、朝食を食べながら、ボソッとそんな事を言った。

『 昨夜、Aアパートで殺人が起きました。犯人は・・・』

テレビの中の「30代を保つてます」的な女の人が、話している。

「また事件か～」

関心の無い声で、わたしは言った。殺人やら強盗やら飛び降り自殺やら、毎日毎日、放送される。よく、そんなに毎日あるな～とニュースを見ながら、寝ぼけた頭で思う。

少しして、私は朝食を食べ終わった。すると、一階から妙にゆっくり降りてくる音がした。

「おはよ～」

「おはよ～、瞳」

降りてきたのは、お父さんだった。お父さんは、どこか寝ぼけた感じで言った。

「今日も眠そうだね・・・」

「そりやそりや。毎日帰つてくるのが遅いのに、行くのが早いんだから。ふあ～」

お父さんは半分愚痴のように言つと、大きな欠伸をした。それを見ていたら、眠氣を抑えていた頭が、ふわっと緩み、眠氣が襲つてきた。テーブルに、頬杖を付くと今にも眠りそうになる。

「早くしなさい」

毎朝、お父さん以上に、お母さんは早起きしてゐるのに眠くないのかなあ、と思いながら一階へ上がる。

しばらくして、全ての準備が終わると、「行つてきまーす」「行つてらっしゃい」と、いつものように、学校へ向かう。

学校

「おっはよー！」

元気に声を、掛けてくれたのは秋だった。

「おはよー！」

私も、それに答えるように言った。

「ねえねえ、昨日の番組見た？」

秋は、バックを机に置くとすぐに私に聞いてきた。

「何の番組？」

「えっと・・・『貴方は何問解けるでシヨー』」

「あれかー。あれは・・・」

宿題が終わり、時計を見ると九時半だった。

「暇になんちやつたなー」

そんなことを呟きながら、下へ降りる。テレビのスイッチを入れると

『はーい。春のスペシャル企画とこ「う」と、貴方は何問解けるでシヨーの時間がやつて参りました！』

なんとも、古い始まり方だなあと、思つていると、番組の内容か紹介された。

『貴方は何問解けるでシヨーは、チーム対抗で行つてもらいます。これから、殺人事件のナゾトキを、チーム全員の力を合わせ、解いて下さい。そして、今回最も点数が多かつたチームには、じゃあーん！100万円が贈呈されます。そしてなんとーこの番組を見てる方も、今回のナゾトキに参加できます。そして、最後まで謎が解けて、抽選に当たった人には、なんとー同じく100万が送られます！』

観客から、おーーと声があがる。

さらに司会者は紹介を続けたが、余り興味のなかつた事なので、冷蔵庫にある飲み物を取りに立つた。

『はい。第一の謎です・・・』

「あれは・・・」

「難しかつたよね。」

秋は、眉を下げそう言つた。

「そう・・・だつたかな? あんまり、そつは思わなかつたど・・・」

「凄いね、私は1・2問ぐらいしか解けなかつたよ。」

「そうだつたんだ。あれさ、全問で・・・何問だつたつけ?」

「えつとね。20問だつたかな?」

「あれの半分は出来た・・・かな? いやそれ以下かな?」

「えー! でも、そんなに出来るなんて凄いじやん! やつぱ瞳は凄いね。」

イヤイヤ~と、私と秋はそんな事を言ひ合つていた。

時はいつものように過ぎていつた。特別な事も起きず、平凡に・・・

放課後。私が、教室を出て行こうとした時、明るい声が私を呼んだ。秋だつた。

「瞳、部活行?」

「ああ、忘れてた・・・」

「うん、いいよ」

「今日は、真子も一緒に。珍しいでしょ~」

「へえー。珍しいんだ・・・」

「あれ? 瞳、驚かない?」

「いや、驚かない? って言われても、あんまり、高島さんの事を知らないし・・・」

「真子ね! 真子の事知らないとも有呂と思つたけど・・・ふ~ん、そなんだ・・・まあいいや。真子のクラス行いつ」

「う・・・うん・・・」

駆けて行く秋の後ろを、私は着いて行つた。

高嶋さんのクラスはまだ終わつてなくて、しばらく待つ事にした。

「さよならー」

教室の中から声が響き、ドアが開く。秋はドアから教室を見渡す。

「真子、先生と話してゐ。あつ、来た。真子～」

高嶋さんは、秋の声に気付いたのか、振り向くと優しく微笑み軽くてを振つてくれた。その後しばらく待つと、高山さんは荷物を持ち、ドアの所に来た。

「陸と裕太はちよつと遅れるつて。だから、本を移動してくれないかつて」

「むふう～」

「そんなにふくれる事ないでしょ～」

「だつてえ。いつもそればっかりじやん」

「んまあ、しょうがないことね・・・」

「むふう～」

2人はそんな会話を子ながら歩く。私はその後ろをトコトコ歩く。2人の話からして、多分、口口最近・・・いや、ずっと昨日みたいの事しかやつてないつぽい。

「ねえ、依頼つて・・・受けた事ないんでしたつけ・・・・・?」

恐る恐る聞くと、2人は同時に溜息をついた。

「聞かれるのは迷惑じゃないけど・・・」

「軽く、部活のコンプレックスだよね・・・」

「瞳さんが入つてくれたのは嬉しかつたんだけど、依頼が無くちゃ、部活の意味無いのよね」

「それに、依頼探して来ようかつて、部長に聞くんだけど・・・」

「面倒だ つて言つて、協力してくれないのよ・・・」

「あの部活作つたのは自分なのにね・・・」

再び2人は溜息をつく。

「え・・・ああ。済みませんでした。何か、無神経で、ホント・・・」

「

「良いのよ」

「瞳が入ってくれた事で、何か変わってくれれば良いんだけどね」

ギシツ・・・ミシツ・・・

相変わらず、無気味な音がする。にしても、何で、旧校舎なんだろ？

そんな事思つていると、部室の前に、一人の男子が立つていた。目を凝らすと、部長の高橋君ということが分かった。

（高橋君、遅れるつて言つてなかつたつけ？）

「裕太、何やつてるの？」

今にも床が抜けそうな廊下を、秋は軽やかに駆けて行く。私は、冷や冷やしながら、それを見ていた。

「ん？」

高橋君はドアを指す。辺り着いた私達は、『あつ』と声を上げた。

「手紙・・・だよね？」

「う・・・ん」

部室のドアに、『依頼状』と書いてある手紙（？）があった。

「依頼の、手紙かな？」

私がそう言つと、『そつかもー』と嬉しそうに秋は言つた。

「珍しい事も起きるなー」

「にしても・・・高橋君・・・遅れるんじやなかつたつけ・・・？」
すると、高橋君が私の方を見た。いつもの見透かすような、何を考えてるか分からぬ目で・・・

「確かにそうだね」

「えつと・・・んー・・・面倒だな」

「ホント、面倒臭がり屋さんだよね、裕太は。面倒がんないで教えてよ」

「栗原先生に『手伝つて』つて言つて、手伝い終わつたから部室に来た。そしたら、コレが張つてあつた

「でも、さつき、城川先生と話したんじゃないの？」

「先生とは少しか話してなくて、君達が行つて数秒後、僕は教室を出た。そして、履箱の所に来た時に、栗原先生に『手伝つて』つて言わたんだ。手伝いつてのが、旧校舎の近くで、ホントに時間はかかる無かつたんだよ」

『だから君達より、早いのは不思議じゃないよ』と付け足して言った。

「ふうん、そうなんだ。まあ、部長が早く来るのは悪いことじゃないからね、いいや。早く、それの中身見ない？」

「そうだね」

そう言って、高橋君は手紙をドアからとつた。

「えつと・・・純桜学園の探偵部の皆様。始めまして・・・

私達は、純蓮大学にある、不思議なことが大好きなサークルです。来月、來桜島という島に行くのですが、島には不気味な数え歌があります。更に、15年前・10年前・5年前と5年ごとに、数え歌通りに人が死んでいるのです。計画を却下する訳にも行きませんので、是非、同行してもらえませんか。答えは、来週までに教えてください

・・・・・だつて

「依頼・・・・つて事だよね？」

「そう理解して良いね」

「確かに・・・純蓮大学つて言つたら、ここいら辺にある大学の中では、優秀な学校だよね？」

「そんな大学からの依頼か・・・・裕君、断る？」

「ううん、面倒なのは嫌だ」

私達は一斉に溜息をつく。呆れるにも程がある。すると、ギシッ・・・ギシッ・・・と階段を上がつてくる音がした。

「あつ、皆揃つて何やつてるの？」

音の正体は、桜井君だった。

「見て見て！ 依頼の手紙だよ！」

秋は嬉しそうに、手紙を桜井君に見せに行く。

「依頼の手紙だね。と言つことは・・・初めて、仕事が来たつてわけだ！」

桜井君も嬉しそうに言つた。秋はピヨンピヨン跳ねて、『やつたー！』と言つている。すると、手紙から、ヒラヒラと何かが落ちた。

「秋、何か落ちたよ」

「ん？」

秋の足元に落ちたのは、一枚の紙だった。二つ折りにされている。

「何これ？」

「どうしたの？」

高橋君と高山さんが秋の方へ行く。桜井君が紙を開く。

「暗号・・・・？」

紙には、意味不明な言葉の羅列があつた。

依頼の手紙（後書き）

絶対意味不明だと思いますので、その所は、済みませんでした！
この先の展開が待ち遠しいと思いますが、待つてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2793d/>

純桜学園探偵部の事件簿～桜の数え歌～

2010年10月11日13時25分発行